

# わたしの修習時代

紀尾井町：1948-70

湯島：1971-93

和光：1994-

△55期△

## ヨコとタテの信頼関係は 掛替えのないもの



会員 松原 功 (55期)

### 司法改革前夜

大学卒業から入所までの15年間、サラリーマンをしていた。営業を担当していた証券会社や大銀行が経営破たんしていた最中、司法試験に運良く合格した。金融界の大再編が進行し、戦後の経済体制が変わろうとしていた時代だった。

### 愉快的前期修習

私は平成13年4月、研修所に入所した。前期修習はとにかく楽しかった。生活の心配なく、社会の実相を見聞し、自由に勉強できる時間は掛替えのないものを感じた。また、希望と才気に溢れた若者から、既に実社会で名を成された大先輩まで、世代を超えた同期の仲間ができたことも大いに愉快的なことだった。ソフトボール大会（の応援）に興じ、大いに酒を飲んだ。私は、会社員時代の役職そのままの「課長」というニックネームを奉られた。大先輩と若い仲間の間で、中間管理職のポジションを楽しんでいた。

### 見るもの聞くもの新鮮だった弁護修習

私は東京において実務修習を受けた。最初は弁護修習。配属事務所の事件は実に多彩だった。先生のお供をして、プロスポーツ選手の代理人交渉や、再審請求のための新証人探しにも行った。地方の工場火災に関して製造物責任の事件の依頼があったときは、訴状の起案をさせていただいた。火災現場に何度も出張して、火災の原因となった機器の欠陥を特定し、パソコンで

膨大な被害品リストを作成した。第1回期日の前に弁護修習が終わってしまったのは残念でならなかった。

### 裁判官の背中をみた裁判修習

次は刑事裁判。著名な重大事件が係属していることもあってか、配属部には緊張した雰囲気が漂っていた。月に4日ある集中審理の日は、裁判長はお茶しか口にされなかった。ある交通業過事件で実刑判決が言い渡されたときのことは忘れられない。判決を下す陪席裁判官自身が自らも重荷を担うような様子だった。裁判官の背中を見て、刑事裁判の重さを感じた。

民事部に移ると、今度は部長の事件処理のスピードに圧倒された。とにかく速い。部長から、翌週審理予定の事件につき、争点は何か、判例は、次回期日の訴訟指揮は、現時点の勝敗見通し如何、などと矢継早に質問された。一生懸命に資料を読んで準備をしても、質問に答えきれずいつも火だるま状態になっていた。裁判長はこんなことを考えて審理に臨んでいるのだということは実感できた。

### 次の世代へ

よき仲間と胸襟を開いてともに学び、先輩からは惜しみなく教えていただいた。将来自分のライバルになるかもしれない相手であっても、時にはご自宅で歓待していただいた。司法を巡る環境はわずか数年で激変したが、ヨコ（同期）とタテ（先輩）の信頼関係は掛替えのないものだと思う。